

いきいき 衍田人

俊足巧打の2番打者として 甲子園で活躍

田中 悠生さん (18歳・佐間)

第93回全国高等学校野球選手権埼玉大会で優勝し、夏の甲子園に出場した花咲徳栄高等学校。今月は、同校のレギュラー選手として活躍した田中悠生さんを紹介します。

小学1年生から野球を始め、中学時代は行田シニアで活躍した田中さん。「高校でも野球を続け、甲子園で活躍したい」という思いからさまざまな高校を見学する中で、花咲徳栄高校野球部の岩井監督から掛けられた「体が小さくても君を使いたい」というひとことで、身長164センチと小柄な田中さんは同校に進学することを決めました。

甲子園出場の夢を胸に抱き、意気揚々と野球部に入部しましたが、さっそく困難が。「慣れない寮生活に、想像以上に厳しい練習。練習についていくのがやっとでした」それでも50メートルを5秒8で駆け抜ける驚異的な足の速さと守備範囲の広さを武器に、1年生ながら外野手として、ベンチ入りメンバーに選ばれました。しかし、メンバー入りしてすぐに利き腕である右ひじ靭帯を部分断裂し、1年間ボールを



投げるのができなくなっていました。そんなつらい状況に陥っても「今の自分にできることをやる」と筋力トレーニングや夜遅くまでの打撃練習に励み、けがを克服後すぐに、2年生の春からレギュラーに抜かされました。

その年の夏の県大会でチームは決勝まで進出し、田中さんに早速甲子園へ出場するチャンスが訪れます。しかし、サヨナラ負けを喫し、あと一步のところまで甲子園の土を踏むことができず、悔しい思いをしたのでした。

3年生が引退し、自分たちがチームの中心となって挑んだ秋の県大会。春のセンバツ出場につながる大事な大会でしたが、初戦で敗退してしまいました。「甲子園に行くチャンスはあと1回しかなくなってしまう」と落ち込みましたが、何度モーターテイングを重ねることで、チーム内に漂う悲愴感を払拭。生まれ変わったチームは春の県大会を制覇し、高校最後の夏の大会でも気負うことなく「絶対に甲子園に行くんだ」という強い気持ちで臨んだ結果、接戦を制し、見事埼玉の頂点に立ったのです。

甲子園では初戦敗退という結果に終わりましたが、田中さんは三塁打を含む3安打を放ち、あこがれの舞台でのびのびとプレーすることができました。高校野球を引退した田中さんですが、「将来はプロ野球選手になって、家族や監督、コーチに恩返しをしたい」と、現在も練習に汗を流しています。胸に抱いた大きな夢に向かって努力する姿に、きっと野球の神様はにっこりほほ笑んでくれることでしょう。

私の作品

俳句

持田 岡本千寿子

蚊を打ちてB型の血を惜しみけり

荒木 増田 時枝

若き日を生き生き話す生身魂

須加 須加 照代

残暑なお一息つける利根の風

南河原 今村 文女

木屋の香りほのかな散歩道

城南 関口 操

コスモスのゆづり合ひつたはむれる

天満 青柳 欣吾

法師蝉合唱を背に作を切る

谷郷 富山 由喜

蝸に急かされている家路かな

矢場 鈴木かつの

すずやかな虫鳴き初めて思ふこと

向町 渡月 峯

みこし渡御拭いてやりたい胸の汗

荒木 藤田 栄之

間をとりにて恋し恋しと綴る虫

城西 西田吉之助

雨止んでこの世の限り鳴く蝉ぞ

城南 橋本千枝子

コーラスにふける授業や晩夏光

城西 八木橋近蔵

石仏に見守られおり萩の花

荒木 蛭間しげ子

真夏日の一の倉沢残雪見ゆ

下忍 阿部 義之

被災地のふるさと恋しや虫の聲

(木島 斗川 監修)



『からす瓜』(絵手紙)
二井 志津(矢場)

◎皆さんの作品を募集しています。
◎俳句は毎月5日までにはがき・封書で広報広聴課へ応募ください。